

第二言語学習者はどのように言語と事象を結びつけるか

—中国語を母語とする日本語学習者を対象として—

酒井弘[†], 龍盛艶[†], 坂本杏子[†], 中石ゆうこ[†], 鄧瑩[†], 小野創[‡]

[†]広島大学, [‡]近畿大学

hsakai@hiroshima-u.ac.jp

事象を把握して言語化する様式は、言語ごとに異なることが知られている（池上, 1981; 影山, 2002）。それでは第二言語を学ぶ場合に、学習者はどのように言語表現と事象の対応関係を理解するのだろうか。学習者が母語における言語化の様式に影響を受けるなら、対象言語との間に「ずれ」が存在する場合に、母語からの「転移」が観察されることになるであろう。本発表では、中国語を母語とする日本語学習者を対象として、文のアスペクト意味処理と動詞語彙概念の学習に関する二つの実験を実施した結果を報告する。実験結果を通して、学習者が言語と事象をどのように結びつけるかを考えてみたい。

実験1: 第二言語における文のアスペクト意味処理

日本語母語話者は、文に含まれる副詞、数量詞、動詞、アスペクト助動詞など、様々な表現のアスペクト情報を逐次的に処理していることが知られている

（龍ほか, 2008）。そのため、複数の要素のアスペクト情報に不一致が見られると（たとえば、限界的な副詞「3日で」に、非限界的な事象を表す動詞「笑った」が後続すると）処理負荷が増大して、文の読み時間が遅くなる。一方中国語の動詞は、日本語のように固定された限界性を持たないといわれている。もし学習者が母語の特性に影響を受けるなら、動詞の限界性に関する情報の処理に、学習者と母語話者と相違が見られるかことが予測される。そこで、中国語を母語とする日本語学習者を対象として読文時間を計測する実験を実施し、アスペクト情報の不一致が学習者の文の意味処理にどのような影響を及ぼすか調査した。調査結果から、学習者のアスペクト情報処理は母語話者とは異なることがわかったが、相違の原因が動詞の限界性の習得に関わるものなのか、文の意味処理過程の相違によるものなのか、さらに検討が必要であることが示唆された。

実験2: 中国語を母語とする日本語学習者による動詞語彙概念の学習

動詞の語彙概念を学習するためには、動的で連続的な事象のどの部分が動詞に対応するかを見定めなければならない (Golinkoff & Hirsh-Pasek, 2008; 今井 & 針生, 2007). 母語を習得する幼児は、語順や項の数などさまざまな手がかりを用いて、対応関係を見定めることが知られている (Naigles, 1990). それでは、第二言語学習者は、母語話者と同様の手がかりを効果的に使用することができるのだろうか. 日本語では、「動作主が」という格フレームとともに用いられる述語は、事象の動作の側面を切り取る「活動動詞 (activity verb)」であり、「対象が」という格フレームで用いられる述語は、変化結果の側面を切り取る「到達動詞 (achievement verb)」である. そこで、成人日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者の二つのグループに、事象と新奇動詞の対応を学習させる実験を実施し、格フレームを手がかりとした学習が可能かどうかを調査した. 調査結果から、日本語母語話者も学習者も、新奇動詞と事象との対応を、格フレームを通して理解していることがわかった. しかし、格フレームが手がかりとして与えられない場合は、事象の理解の仕方が異なることも明らかになった. これらの結果の検討を通して、言語の表面的な特徴を学習の手がかりに使用することは、第二言語学習者にも可能であるが、語彙概念自体を理解するためには、母語の知識を介在させる必要があることが示唆された.

キーワード：第二言語習得，文の意味処理，語彙概念の学習，アスペクト